

---

---

# Saturday

**-The Pink Diary-**

---

---



**Presented by  
Nina Seira & Ruri Hazuki**

# Saturday

- Character -



 遊佐葉子  
Yoko Yata




 千海理菜  
Luna Chikai



 吉野桔桃  
Kikyo Yoshino




 椿水楓  
Kaede Matsumaga



 遠石聖  
Takari Tsukiki



 畑中夕陽  
Yuki Hatanaka



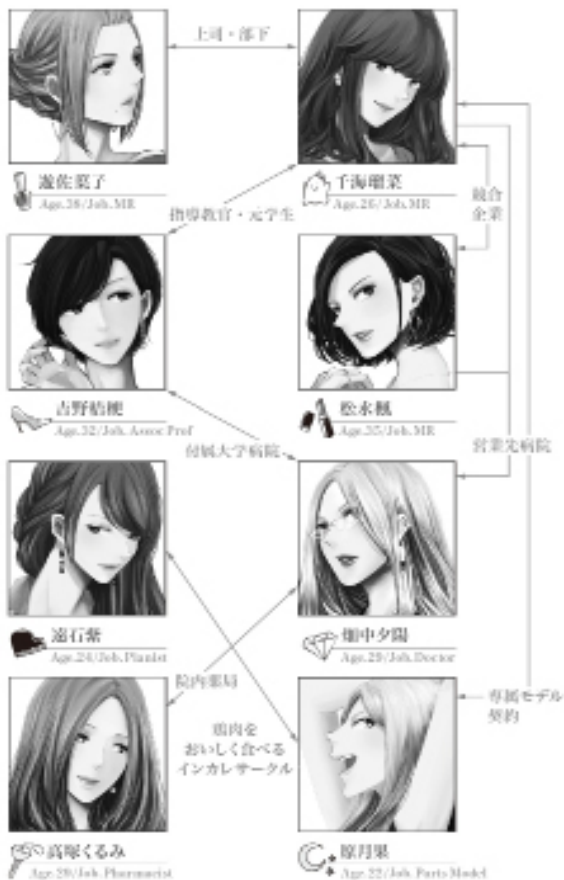
 高塚くるみ  
Kourumi Takasawa



 塚月果  
Tsukiko Mura

# Saturday

- Character -



# Saturday

-The Pink Diary-

We color your everyday with something Saturday!

# Date List

---

**4/27 Active**

あなたの好きな食わず嫌い

**10/2 Rain Check**

予約は受け付けておりません

**5/12 Receipt**

おともだち

**11/1 Something Black**

ふいうちブラック

**6/3 On Purpose**

大げさな時鳥

**12/23 Proposal**

誰かのハッピーエンド

**7/21 Wrong Trip**

アップタウン・ガールズ

**1/4 The Call**

はじめてのファンファーレ

**8/10 Hangover**

免罪符

**2/14 Competition**

チョコレート戦争

**9/23 Call Me Maybe**

ヒロイン

**3/10 Make Up**

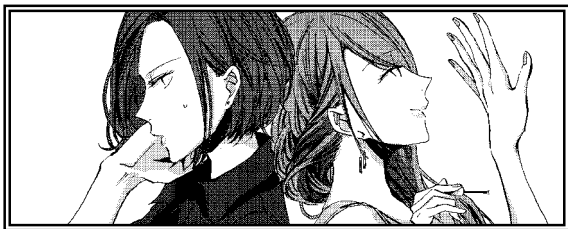
コスメティックラブ

**The Pink Diary**

---

Date.4.27

Pov.Yukari



## Active

あなたの好きな食わず嫌い

「すごい」

たつぷりと間を取った後に、半分唸るような声で呟いた背の高い女の人が、ずつと組んでいた腕を解いた。長い腕、その先の手にある指も長い。ついでに爪も。もつとも、頻繁に病院に出入りする仕事柄か、十本とも綺麗に整えられているので、爪自体がそもそも人よりも細長いのだろう。

「あなた、本物のお嬢様なんだ」

そう言つて吹き抜けを見上げる首も、すらつと長い。どこもかしこも人より数段丁寧に神様に伸ばされたみたいに。

「本物じゃないお嬢様なんていま

す？」

変な賞賛に苦笑しながら、赤いソールのパンプスを脱ぐ。

「そうね、訂正」

少し遅れて脱がれたパンプスは、シンプルな形にうるさくない程度に小粒のスタッズが施されたものだ。わたしはまだ働いたことがないので、それが社会人としてふさわしいデザインなのかどうかはわからない。でも、その鋭角的なデザインが持ち主によく似合っていることはよくわかった。

律儀に膝を折ってそれを揃えながら、松永楓はくすつと笑った。

「あなた、本当にお嬢様なんだ」

「そっちの方が正確な感想に聞こえます」

スリッパをすすめながら、首をかき上げて年上の女を見上げてみせる。

「わたし、親しみやすいですもんね？」

「面白い性格してるのはたしかね」

あんまよく存じ上げないけど、とにつこりしたお客様を「だから今日お誘いしたんです」とわたしは家に招き入れた。

「うーん、入るとさらにすごいわね」

コーナーソファに体をうずめたショートカットの女の人は、クッションを二つも抱き、長い脚をカーペットの上に投げ出して唸った。立っていたときには膝を隠していた白いタイトスカートの裾がほんの少し上がって、右の膝が見える。ストッキングに包まれているその膝の白さに視線を落としながら、わたしは相槌を打つ。

「そうですね」

ひとり暮らしをするなら実家から歩いて行き来できる距離で、と用意されたマンションは最上階のペントハウスだ。ゆつたりとしたメゾネットで、部屋の中には螺旋階段がある。親の持ち物なので別に自慢するようなものでもないとはいえ、その正当な価値は把握しているので、特に謙遜はしないことにしている。

「何か飲みます？」

「え、ああ。ありがとう」

普段の（というほどよく知っているわけではないけれど）ぐいぐいとした押しが強さが、少し和らいでいて面白い。でも、それもそのはずだ。何度か大勢で会ってはいけるけれど、その場でじっくり話したことはないし二人で飲んだこともない。ましてや、家に招くのなんてはじめてだ。



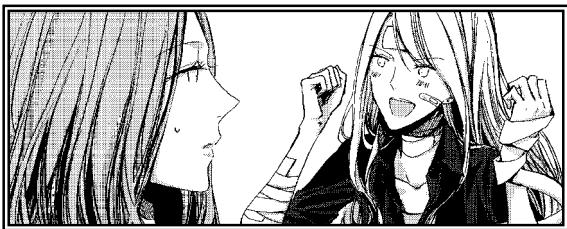
これがきつと、松永楓という人の本当の社交モードなんだろう。

「ちよつと待っててくださいね」

立ち上がったついでに、リビングの空調を調整しながら、部屋の奥に向かう。

「どうもー」

背中から追いかけてくる声は、これから届くアルコールを予期してか、先ほどより既に少しくつろいでいた。



## On Purpose

大げさな時鳥

「どうしたの、それ」

梅雨が始まったのか始まってないのかまだ曖昧な六月のはじめ、湿度だけはたっぷりこもった夜の空気といっしょに、にぎやかな気配が玄関先からなだれ込んできた。

わたしの幼なじみ、畑中夕陽の家に泊まろうとしている迷惑な二十二歳を、なかば強引にうちに泊めて以来、しばしばと呼ぶには多すぎる頻度で原月果は我が家にやってくる。

夕陽と同じマンションの数階下之家をかまえる、わたしのもとへ。

ブロンド、色の薄い瞳、長い手足に彫りの深い目鼻立ちと、やたら情

報量の多い美人に押しかけられるのもそろそろ慣れたけれど、今日はいつもより更に騒々しい出で立ちだった。

「めずらしい」

外の匂いを部屋の中に連れ込んで、しゃがみもせずに器用にスニーカーを脱ぎながら、原月果は大きく口を開けて笑った。

「くるみがびっくりしてる」

びっくりもするわよ、と思わず呆れた声が出る。

「手首、倍になってるけど、どうしたの？」

もつとひどいことになっている人も職業柄見慣れているとはいえ、平日の午後二時に大病院の中の薬局で見ると、もう土曜日になりかけている金曜日の深夜二時に自宅の玄関で見るとは、ちょっと別の話だ。

知り合いの製薬会社の専属パーツモデルをしている伸びやかな二十二歳は、武勇伝のように笑う。

「受け身に失敗した」

「受け身？」

「今日ねー、殺陣を習ったの。月果、上手くなると思う。才能がある！」

殺陣？ 最近のモデルはそんなレッスンもするのかと驚いたら、舞台や映像の仕事をやれることもあるので、事務所がまんべんなくやらせるのだという。

「よくわからないけれど……それ、平気なの」

「次の撮影は週明けだし、それも脚の撮影だから、ぜんぜんへーき！」

すがすがしい笑顔でそのままベッドへ突進しようとしたお客様を、背負っていたリユックを掴んで固定し、体の前に回り込む。

「本当に捻っただけ？ 折れてるんじゃない、これ？ 病院は行ったの？」

「えー。平気だよ、へーき。湿布はつときゃ治るよ」

そういえば、夕陽が今日は日付が変わるくらいには戻れそうって昼間言ってたけ、と思い、天井を見上げる。その上の上の、更にもう少し上の階でくつろいでいるであろう、お医者様の顔を。

一瞬浮かんだ顔と案を、頭の中で打ち消す。こんな夜中に正々堂々と夕陽の部屋に押しかけられるのは魅力的だったが、それが月果の引率なら、百害あって一利なしだという気がした。そもそも、整形外科では、わたしの幼なじみの担当外だ。

「まあ、いいわ」

そこまで考えて、首を振ったのに、「あ！ そっかー！」不思議そうな顔でわたし

を見つめていた月果が、ワントンポ遅れて視線の動きを理解した。

「くるみ、あつたまいー！」

「行かないわよ」

せつかく何か言われる前に先んじてにつこりと否定したのに、頭の中に思い浮かんだことをぜんぶ口に出さないと気が済まないらしい。

「夕陽かー！ 同じ建物にドクターがいるっていいね」

わたしは、先ほどと同じ内容の台詞を繰り返す。

「行きません」

「行きたい！」

「明日の朝、病院に連れて行ってあげるから、今日はそのまま寝なさい。応急処置、してもらってるみたいだし」

「えー。なんだかすごく痛い気がしてきた」

とつぜん当たり屋のようなことを言い出した美人に、わたしはソファアに置いてあったバッグを手に取り、につこりしてみせる。

「じゃあ、救急に行きましょうか」

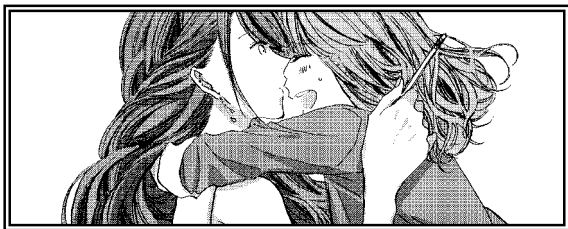
くるみは意地悪だ、とどう見ても親切心あふれる人の提案に、手首をかばったモデ

ルはその整った顔をゆがめて、不服そうにソファーに腰を降ろした。  
「わかったよう。わかりました」

そして月果は、仮病を覚えた。

Date.9.23

Pov.Yukari



## Call Me Maybe

ヒロイン

シャワーを浴びて出るそれだけの間に、画面いっぱいを埋め尽くすほどの通知がきていて、私は簡単にうんざりする。

最近カバーを変えたばかりの iPhone を手に取り、ちよつと触れるとスクロールするほどの通知量で、またしてもあつざりと嫌になる。だいたい私は元来、そう我慢強いほうじゃない。

その中に珍しい電話マークの通知を発見して、慌てて大量の LINE 通知の中から、ピンク色のアイコンのものを探し出す。電話もほとんどアプリで賄うようになったので、直

接電話番号にかけてくるのは、昔からその方法で連絡を取り合っている数人だけだ。

汗マークと涙のスタンプが連投されているトークをざっと読み、私は久しぶりに電話のアイコンをタップした。電話は待ちわびていたようにワンコールでつながる。

「あ、瑠菜？ 電話くれてた？」

ゆかりだあ、とへなへなした声がコーヒーに溶けていくマシユマロのような甘さで耳に流れ込んでくる。ごめんね、ちよつとどうしても私の家から持ってきてほしいものがあつて、と先ほど文章で書かれていたことが今度は音声で説明される。

「うん、大丈夫。LINE読んだよ」

まだ濡れている髪をざつくりとタオルでハンドドライしながら、ウォークインクロ―ゼットへ向かう。

「そつちまで行けばいい？」

車を運転するので、足さばきのいい丈のワンピースを選び、電話を耳に当てたまま、それを頭からかぶる。

「出ようと思えば、十分後には出られるけど」

どうせお昼にしか抜けられないから、十二時半に会社の前の大通りで落ち合えると助かる、と電話の向こうの幼なじみは、既に安心しきった声音で明確な指示をくれた。



「あ、そんな感じ？」

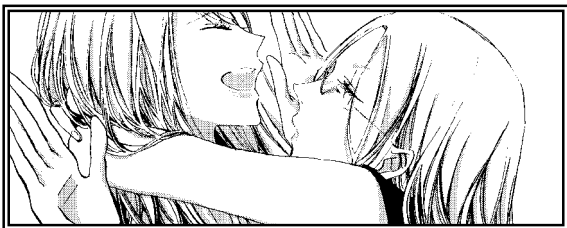
それならきちんと髪を乾かしてから瑠菜の家に寄り、頼まれ物をピックアップしてから行つたので、ぜんぜん間に合う。

「うん、それならぜんぜん平気」

着いたら電話してね、という声がもう忘れ物を手にしたようなやすらかさで、私はそれに満足して名残惜しい通話を切つた。

Date.10.2

Pov.Tsukika



## Rain Check

予約は受け付けておりません

柔軟剤の香りがするリネン、するすると肌に冷たいガウン、たくさんのクッションに、横になつても縦になつても眠れるキングサイズのベッド。

シーツの上にこぼれる髪も日に透けたような淡い色で、現実的なものといえば、その髪の持ち主がかけているメタルフレームのめがねだけだった。

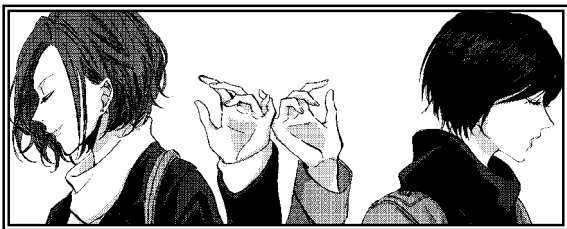
「あれ？」

それがぼやけて見える距離でまばたきをして、今しがたのできごとを口に出して整理する。

「チューできちゃった」

Date.12.23

Pov.Yoko



## Proposal

誰かのハッピーエンド

都合の悪い偶然というのは日々溢れているのに、どんなに熱心に願っていても、都合の良い偶然というものにはなかなか巡り会えない。

もちろん、世の中には運の良い人というのがいて、きつとそういう人にとつては、ぽこぽこと沸かしたお湯が沸いてくるのと同じくらい当然に、そういうラッキーな偶然が舞い降りてくるのかもしれない。

でも、ビンゴをやれば、だいたいほとんど穴が開くのに肝心の最後のひとつがどのラインも開かないという、中途半端な運の持ち主のわたしは、あまり偶然には期待をしないこ

とにしている。

「だいたい、とわたしは脚を組みたい衝動を抑えながら、こちらは我慢しきれずにこきこきと首を鳴らした。ほんとうに運が良いなら、せつかくの祝日にこうして仕事の講演会に来たりはしてないはずだ。それも、十二月で唯一の、今年最後の祝日に。」

そのうんざりとした気持ちは、司会に促されて登壇した背広の上に白衣を羽織ったどこかの代表が、「祝日にクリスマスと忙しい時期にこうしてお集まりいただいて」という文句から挨拶を始めたことで、数倍増長された。改めて人に教えてもらおうと、一年で最後の祝日に働いているというのは、あまりにも象徴的過ぎる気がして少し気が重い。

まあ、仕事が嫌いなわけではないのでいいのだけれど、と思いながら左中指の指輪をくるくると回すと、手首にはめていたブレスレットがしやらりと音を立てる。その思いのほか響く金属音に肩を竦めていたら、隣からこきこきと手の関節を鳴らす音がした。

その不作法さに、自分の立場を思いだし、いなすように太ももに指を伸ばす。

「やめなさいね、楓ちゃん。授業に飽きた高校生じゃあるまいし」

「そういう遊佐先輩はさつきから」と、わたしと同じくらい不憫な境遇の同業他社は、

ほとんど口を動かさずに憎まれ口を返してくる。「楽しみにしてたCDに、二十秒の謎のイントロが入ってたときみたいな顔をしてますけどね」

厳しい先生の授業中に私語をするときのような囁き声で、わたしはお小言をやめて返す。

「あれ、順番に聴いてるときはまだいいんだけど、シャッフルをしてるときはほんとうに謎なのよね」

まあ、なにはともあれ、とまとめた髪に手をやりながら、わたしは自分に言い聞かせるようにのんびりとほほえんだ。

「主催じゃないだけマシね」

その言葉には、心からの賛同が低い声で返ってきた。

あまりほめられた会話ではないけれど、それでも、祝日の午前十時に、乗り換えの便のたいしてよくない駅にあるホールで、脱いだコートをかけた膝の上に部署宛の招待状を伏せるといふ不幸な目に遭っている身としては、十分にポジティブな態度だと思ふ。

「挨拶が終わったら起こしてください」

自己評価が高いのは、隣に座った年下のライバルMRとの数少ない共通点だ。ここ

に來た自分を既に評価しているらしい美人の言い分を、わたしは曖昧な相槌で受け止めた。

しっかりと目を閉じた松永楓をよそに、それこそ学生時代、全校集會に飽きたときにしていたように、ぐるりと会場を見回す。ゆるやかな階段状に座席が配置された講堂は、前に座った人の頭が意外にもよく見える。我々と同じように少しだけ首を傾けて囁き合っている二人組、何人かで來たらしく、端からパンフレットを回しているグループ。知っている顔があれば、後で挨拶だけでもしておこう、と思つてぎっくりスキヤンしていた目がホールのど真ん中で止まる。

「あら？」

思わず口からこぼれた怪訝な声に、隣で目をつむっていた年下のMRが片目だけ開けてこちらを振り仰いだ。なんですか、と言っている少し焦点の合っていない瞳に、「ううん、珍しい人がいる、と思つて」と数段前の列を顎でしゃくってみせる。

「あ、ほんとだ。吉野桔梗じゃないですか」

別にこういう講演会で彼女を見かけるのが珍しいわけではない。違和感の理由は、わたしよりも最近よく彼女とお酒を飲んでいらしい松永楓も同じだったようだ。

「珍しい。だいたい学生だけ置き去りにして、自分は外でコーヒー飲んでるのに」

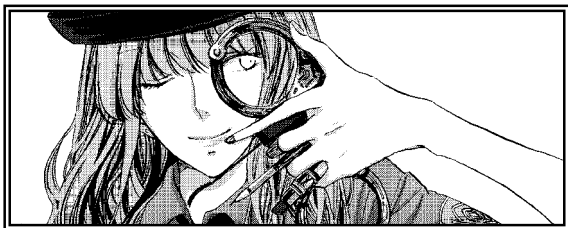
あまりに適切な評価に、思わず笑ってしまう。

「終わるまでいたら、それは奇跡だから声をかけましょ」

そう決めると途端にこれからの小一時間を耐えるモチベーションができて、わたしはしっかりと背筋を伸ばして、相変わらずだらだらとした挨拶が続いているステージをまっすぐ見下ろした。

Date.3.10

Pov.Kaede



## Make Up

コスメティッククラブ

「おはようございまーす！」

「おはようございます」

スタッカートまみれの挨拶に眉をしかめながら、こちらも営業の常ではきはきとした挨拶を返してしまふ。

あれ？ と近寄ってきた千海瑠菜は、同じ病院で同じ先生を担当している他社のMRで、こうして寝不足な朝に聞くにはつらいソプラノの声をしている。

「今日うちがアポイント先ですよね？ なんでもう来てるんですか？ 楓さん」

「それは私が優秀だから」

耳をふさぎたくなるのをこらえて、



余裕綽々で口角を上げてみせる。

「もしかすると、資料を忘れてベソかいて遅刻するどんくさい新人がいるかもしれないでしょ？ そのときには颯爽と、忙しい畑中先生の貴重な時間を埋めて差し上げないと」

「それ、私のことですか？」

今日もつやつやと唇を光らせたいつまでも新人に見えるMRは、ふっくらとした頬を更にくらませた。

「もう新人じゃないし、どんくさくもないんですけど」

「それにしても、未だに律儀にアポイントの三十分前に来るんだ」

「それは、まあ。何があるかわかりませんし……」と本当に新社会人のような心構えが返ってくる。

「早く来たら、ゆっくり準備もできますしね」

それはますます感心、と内心相槌を打つ。

「それに、私があなあになつたら、たぶん、夕陽さん今みたいにお家に招いてくれたりしなくなっちゃうと思うんで」

ふうん、と思ったのがそのまま顔に出ていたのだろう。

「なんですか？」

馬鹿にはされないぞ、という気合満々の瞳に見上げられて、私はそのカラコンを入れていたような眼力に目をそらす。

「いいえ。ちび千海にしては、いい心がけじゃない」

「それ、最近流行ってるんですか」

「なにが？」

「人のこと、ちび千海って呼ぶの」

「だって、ちびじゃん」

「私、そんなに背低くないですよ。世間一般だと」

「高くないでしょ」

眠気覚ましに買ったコーヒーを一口飲むと、ようやく少し頭がクリアになってくる。

「私からねー、いつも千海がどうやって見えてるか、教えてあげようか」

近くのベンチに腰を降ろし、そのまま立っている千海瑠菜を見上げて、品を作る。

「えー！ ひどい、楓さんっ！ 私、ちびじゃありませんっ！」

高い声を出すとまだちよつと頭がくらくらするな、と思つて眉間の皺を揉んでいたら、隣に腰を降ろした本人がじとつとした瞳でこちらを睨んできた。

「……それ、私の真似のつもりですか」

似てないですよ、と言われ、あっさりと同意する。

「うん、かなりね、遠慮したから」

なんですかその言い草、とふわふわした同業他社のMRは髪の毛を弾ませて、きやいきやいと怒る。

「なあに、もつと写実的なやつやる？」

やらなくていいです、とこちらに乗り出して嘯みついてきたちび千海が「あれ？」

と呟くと、突然体を大きく引く。なんだろう忙しい子ね、と思っただら、ぐつとまた茶色い瞳が近づいてきた。

「楓さん、髪切りました？」

へ？ と自分の髪を触る。

「切つてない、切つてない。もうすぐ行かなきゃって思ってたところ」

なんだ突然と首を傾げていると、「あ、そっか」と、千海瑠菜はひとりで納得した。

「メイクが違うんですね」わー、いつもとぜんぜん違う、と身を乗り出して言われて、今度は私が思わず体を大きく引いた。

+ Adult but Platonic. +

# Saturday

-The Pink Diary-

無責任会社サタデー  
saturday.m.company@gmail.com

文・星羅にな  
絵・綺月るり

発行 2017年9月24日 初版発行  
印刷・製本 サンライズパブリケーション株式会社様

A vertical pink bar is located on the left side of the page.

**We color your  
everyday with  
something  
Saturday!**